



俳句雑誌[おき]

2月号

沖 発行所

杉ぶすま

能村 研三

「俳」活運動

はすのたね シャワーになつてよつてこい

石井 直記 小学一年

えん天にヒヤリとさむいやふ知らず

谷 美羽 小学二年

私が選者をつとめる「市川市手児奈文学賞」の子どもの部の本年の入選作品である。

一句目、昔、市川の行徳には蓮田があった。蓮は花が咲いた後はシャワーのような形で立っている花托と言われる部分にたくさんの実が詰まっている。俳句の季語に「蓮の実飛ぶ」があるが、シャワーの形をした蓮の穴から本当に飛ぶと思う純粹無垢な心に感心した。

二句目、市川の八幡には「藪知らず」という古くからの名刹がある。広辞苑にも出てくるほどで、江戸時代の頃はもつと広くて水戸黄門が迷つて中々出て来られなかった所と言われていた。今でも鬱蒼とした「藪知らず」の前に行くに夏の炎天の時でも冷気を感じさせる。真夏の最も暑いさなかでも「ヒヤリと寒く」感じた感覚はすばらしい。

「市川市手児奈文学賞」は今年で十四回目を迎えた。この賞は作品募集をして選考発表するだけにとどまらず、小中学校に市内の俳人が出向

踊り場の小窓より見ゆ冬至風

寒雲を支ふ仁王の怒髪像

松過ぎて早立ちしきバイク音

淑氣満つ梅鼠てふ古代色

平成も四半世紀とや切山椒

杉ぶすま直立にして雪しまく

薄明に草稿練るも寒復習

石川箆尻句集『馬込百坂』

大森に谷坂いくつ臙酔ひ

頓所友枝句集『冬の金魚』

おふくろと呼ぶる日いつか梅日和

林昭太郎句集『あまねく』

一枚の空をあまねく白辛夷

き「出前授業」という形で、直接俳句を指導している。各学校の先生方からも好評で年々その指導の学校も増えている。

芭蕉に「俳諧は三尺の童にさせよ」という言葉があるが、低学年に俳句を簡単に教えることが出来るかという不安があった。しかし芭蕉が言う通り無垢な子供たちの感じたままのことを、常識のフィルターを過ぎずに表現してしまう力に感心させられた。

出前授業でいつも思うことは、純粹無垢な子どもたちに、このままずっと俳句を続けてほしいということだが、今の教育体制ではなかなか難しいことだと思われる。しかし、子どものうちに俳句を作る体験をしたことで、大人になって俳句を作る環境が出来た時に、この経験がきつと生かされ、俳句に戻ってきてくれるだろうことを願って指導にあたった。

次世代の俳人を育てるために、全国的にも様々な形で取組みが行われているが、主催者側においても辛抱強い努力が必要であると共に、一人一人の俳人が自分の周囲の若者に俳句を勧める「俳」活運動を提唱したい。

蒼茫集



正義の白

頓所友枝

楯積んで水音絶えざる宿場町
発想の錆つくままに冬帽子
眠らむと富士は裾野に雲を置き
暮れてなほ槌打つ音や十二月
暮早し時折霞む見舞文
牛乳に正義の白さ降誕祭

寒 卯

吉田陽代

メール打つ無言をのせて暖房車
冬麗のミソドの和音ひびく窓
働かぬ身の輝を恥ぢにけり
寒卵いのちはじめの日の出いる
佳きことば聞くは力や冬木の芽
書初の自在は吾子に及ばざる

オーロラ色

久染康子

断崖を踏み外したる夜這星
櫓田に霧の薄蓋多摩郡
出入りの半間残し掛大根
探梅行廁を借りる御師の宿
鰯酒やオーロラ色のほのほ立て
冬至かぼちや掃除の度に転がさる

一陽来復

北川英子

冬廊下ナースに足音なかりけり
いのちの尾離してならじ冬銀河
義士の日や橋一つ遠廻りして
一陽来復お蔭様度を幾度も
氷点の我が家に炎いろ退院す
美しきもの毀したき霜柱

山眠る 高橋あさの

子らの声朝日にはじけピラカンサ
やはらかく添ふ雲信じ山眠る
すこし罪めくふはり踏む朴落葉
赤城嶺の風と睦みて千大根
祈るには迅き師走の流星群
走者いま五区の田園空つ風

その軽さ 甲州千草

抱き合うて勝者の跳ねる黄落期
五つ珠そろばん錦秋の呉服店
立冬の風より紙に負けし傷
雪蛸七・八分の渡しし舟
太陽のうろこほろほろ冬の滝
その軽さ嫌ひしをとこ羽蒲団

水平線 荒井千佐代

長崎の坂また坂や寒波来
海すでに闇となりたる焚火かな

レコードに針を置く音冬銀河
罪深き日の寒紅を拭き取りぬ
ちちははがどこにもをらず竜の玉
煤逃げの水平線まであとすこし

しやぶしやぶ 林昭太郎

自販機に売切れランプ寒波来る
熱爛や品書のみな魚偏
お手玉の中に鈴の音一葉忌
袖口に輪ゴムのたまる年用意
風鳴りの中に海鳴り大枯野
雪原を来てしやぶしやぶの肉揺する

根雪 大畑善昭

蓑虫の蓑に宇宙を覗く穴
炉のくゆり芝居は巡礼おつるの場
猟期来る箱の施錠の外されて
一昼夜根詰めて降りもう根雪
明け方の無傷新雪搔くに惜し
脳味噌を冬青空に浸けおおか

眼差し 藤原照子

江東の川の十字や穂絮とぶ
眼差しは冬かもめ追ふ芭蕉像
鯛焼を買ふいささかの負の心
円空仏数多を裾に山眠る
補聴器へ己が靴音冴返る
霜の夜や脳の錆びゆく音かとも

句 敵 安居正浩

伊右衛門のお茶と並びて日向ぼこ
降る雪や夜は牛肉か豚肉か
冬帽子かぶりやさしき顔になる
深酔の落武者めきぬ年忘れ
句敵も病んでゐるなり枇杷の花
冬景色見え点滴の管三本

断 層 千田百里

夫の故郷我には異郷雪催
降る雪や紙幣に残る明治人
十二月八日陽落つる音を聴く
勘三郎さらひし冬のあらしかな

冬鴟や断層走るの走らぬの
年用意仕分けて午前午後夜間

玄 界 辻美奈子

玄界や烏賊の造りの透きて冬
海の中道冬波を抱く馬手・弓手
ふつくらと富士の暮れゆく冬至かな
竹馬の名手でちよつとせつかちで
木枯の夜の絶対音感よ
マッコリ酌むからだ北半分寒し

筆 太 秋葉雅治

一の蔵二の倉つくば風かな
潮ざぬを隠し味とし牡蠣フライ
倫敦のしぐれ短し漱石忌
義士の日を禁酒発起の日とおもふ
筆太に始めましたと牡丹鍋
語り部や昭和遠のく冬帽子

十 番 線 松井志津子

いつしかに身に合ふ妣の秋袷
見通せる十番線の先も冬

密漁の話に及ぶふぐと汁
鯉耀るこぼれ魚は海へ掃き
小座蒲団冬日に並ぶ通過駅
ふるさとの筵あと秘む鏡餅

運不運

楠原幹子

絵はがきの和紙の手ざはり小六月
木枯に押されおさるる車間距離
清濁の濁に肩入れ爛熱し
着ぶくれて三次会にもついてゆく
運不運かたよりやすく隙間風
もがり笛喪中挨拶にて知る死

狩の犬

広渡敬雄

おがくづに雪の匂ひや猟期来る
冬の山刃物を研ぐに胡坐よし
幼くて耳の垂れたる狩の犬
雪食うて喉乾きけり如意ヶ嶽
耳の穴奥まで見えて冬あたたか
雪嶺の輝く空の冷えまさり

冬満月

宮内とし子

サキソフォンの人恋ふ音色聖夜かな
黄落のとぎれし角の洋食屋
吹きかくる酒に青増す注連作
ノーベル賞すでに過去とや冬満月
富士を背に大根畑日を溜める
居酒屋の肴分けあふ討入り日

励ます色

細川洋子

潮の引くやうなひと日よ湯ざめして
冬紅葉おのれ励ます色なりし
柊咲く児の眩きは詩となりぬ
一点の恙ある身を冬銀河
裸木といふ安らぎに佇める
わたくしも充電したき枯木立

流星群

吉田政江

ポインセチア階段一段飛ばしかな
釣瓶落し自転車鍵探さねば
頓服を飲み二の酉と思ひけり
眠気よぶ薬の二錠日短
湯豆腐や素直な気持まだありし
ひとり起きて冬の双子座流星群

潮鳴集

地平線

福島

茂

長き夜の魂叩く津軽三味
傷口のやうなり昨夜の焚火跡
家を守る砦のやうに大根干す
木枯の研ぐ完璧な地平線
流木の芯まで乾き寒波来る

いかのぼり

石川
笙
児

掌中に胡桃怒りを抑へをり
心中は美しき世話物浮寝鴛鴦
日当りて隙間風あり憂国忌
煤逃げの出来ぬ男もみたりけり
束縛といふいのち綱いかのぼり

荒磯つづき

佐々木よし子

ぼつくりを脱ぎて朱の靴七五三
島裏は荒磯つづき石踏つづり
冠雪の富士を讃へむ長停車
身幅ほどの路地にかぶさる笑石榴
午後の部へオルガンはこぶ運動会

うさぎの耳

内山
花
葉

月あれば酒酒あれば句敵来
木登りの子の突つ込みし柿の天
フクシマの灯のぼつりぼつんと月冴ゆる
りんごむくうさぎの耳をたててむく
見え切つて冬はなやかに役者逝く



沖作品



能村研三選

手に負へぬ微分積分放屁虫
木の実独楽じんじん回り淋しいぞ
狐火のとぶやじよんがら急調子
自分には見えない背中日向ぼこ
煮凝のはじから溶ける介護論
蔵の名は藩主命名寒づくり
綿虫や造り酒屋の屋敷神
しぐるるや社訓の古りし醬蔵
冬もみぢ練り堀長き隠れ宿
冬空のサッカーボールの弧の行方
冬耕の畝まつ直ぐに夕日まで
穴惑午後 光を斑にし
ペンを置く音の吸はれて初時雨
フオーカスは無限大なり冬銀河
冬波の底鳴り発条に出航す

東京

関根 揺華

長崎

水木 沙羅

千葉

小河原清江

十三夜路地に残れる旧字体
音消えて空の戻りぬ威銃
海坂のあるや枯野の向かうにも
鳥の目に十一月の町一つ
遠き日の地面の遊び小六月
敷紙の椿が酒に浮かびくる
奥能登の家並片寄る波の花
幕張りの塗師の年の瀬魂ふやす
金粉の筒打つ指に冷えきたる
鱒網の粗声宙に鱗飛ばす
石切の北壁峨々と冬に入る
しぐるるや蠟涙白きマリア像
冬晴や射手緊張の袖さばき
竿受を打ち込む冬の磯根釣
大鷹や男神女神の嶺かすめ

神奈川

菊川 俊朗

石川

我門 行男

千葉

石崎和夫

沖作品 15句選評

*
能村研 評

自分には見えない背中日向ぼこ 関根 瑤華

風の無い冬の日、太陽に当たりのんびりと過ごしている時は気分がよい。昔は、お年寄りが縁側などでよく話をしていたが、最近は見かけなくなった。家の造りが、縁側が無くなりサッシになったり、近所付き合いがなくなってきたり、のんびりとお日様に当たりながら話することも無くなってしまったからであろうか。最近縁側が変わってサンルームがその役割を果たして、それも日向ぼこになるのだろう。背中に陽があたつて、ぽかぽか温かく感じるがたしかに背中中は自分からは見えないものだ。「背中が語る」という言葉があるように、自らの顔と同じように、背中はその時代の生き抜いてきた、人それぞれの人生そのものを映し出してくれる。

冬空のサッカーボールの弧の行方 水木 沙羅

近年は空前のサッカーブームだが、俳句で詠まれるのはラグビーの方が多くそれも昭和に入ってからのものである。特に山

口誓子が昭和の初めにラグビーの句を連作し、これが契機になって冬の季語に定着したと言われている。サッカーもラグビーと同様冬の季語として扱っても良いであろう。作者はテレビでの観戦ではなく競技場へ足を運んでの観戦をされたのである。句からも現場の臨場感が伝わってくる。テレビ中継であるボールの行方も隙なく捉えて私たちに伝えてくれるが、競技場では回りのサポーターの歓声も加わって興奮する中の観戦となる。シュートした時ボールが弧を描きゴールに向かっていったのだろう。

穴惑 午後の光を斑にし 小河原清江

冬眠すべく仲間はほとんど穴に入ってしまったのに、いつまでも地上を徘徊している蛇のことを穴惑という。今年の干支は蛇だが、蛇を嫌う人は多い。しかし、このような季語が存在するのは、日本人にとつての蛇が極めて身近な生き物であったこととの証でもある。嫌いだけれど、とても気になる生き物だったのだ。午後の光を斑にしたという作者の捉え方が面白い。

音消えて空の戻りぬ 威銃 菊川 俊朗

鳥獸などを追い払うためにたてる大きな音をいう。実際に銃を撃つわけではなく、空気を圧縮して銃に似た音を立てる。長閑な田園に一定間隔で爆発音が響き渡る。一度音が鳴るとその残響は近くの山々に響き渡り、とてもね返り響き渡る。音が鳴った瞬間は稲田にいた鳥たちは一斉に飛び立つが、音が止むとまた静寂な空が戻り、飛び去っていた鳥たちも稲田に三々五々戻ってくる。(以下略)